

学年 第2学年

時間 1時間

題材 八木一夫

HA 122	明瞭かつ不確実に	1977年		HA 185	先導者	1974年
HA 123	入り日引き潮	1977年		HA 186	発芽の様相	1977年
HA 124	黒陶	1977年		HA 187	雲の記憶	1978年
HA 172	翔鳥花壺	1959年		HA 194	盲亀	1964年
HA 173	扁壺	1967年		HA 195	人物	1964年
HA 174	ブラックエコー	1978年		HA 196	ブルーブック	1972年
HA 175	表裏なし	1978年		HA 197	いつも離陸の角度で	1977年
HA 176	黒象嵌花生	1959年		HA 198	盲亀	1978年
HA 184	右の目と左の目の情報	1968年				

題材について

第2学年の生徒は、美術作品に対するイメージも少しずつ持ち始めてきていると考えられるが、美術史上でも「陶芸」のイメージを覆したといえる八木一夫の作品は生徒に強い印象を持たせると考えられる。

純粋な芸術作品としての陶芸を追い求めた八木一夫の作品は、中学生にとって「陶芸」のイメージとはかけ離れたもので難解といえるかもしれないが、中学生だからこそてる柔軟な部分で作品の鑑賞をし、大人には思いもよらない新たな発見をし、鑑賞を楽しめる。

八木一夫は既成の陶芸のイメージからの脱却をはかるために苦労した模索の時期を経験している。

さまざまな価値観のなかで揺れる中学生にとって共感できるところも多いと考える。

作品には八木一夫が言葉の持つ意味を重要視していたと思わせるタイトルが付けられたものが多い。鑑賞にあたっては作品とそのタイトルに注目させていく。

作品図版とタイトルから得た感想を交流した後、他の作品のタイトルだけを提示してそこからイメージして作品を創作しエスキースを描く活動を取り入れた。

八木一夫の制作過程を追体験するような活動を通して、作家の豊かな造形性を感じるとともに、自らの感性にも気づかせることができると考える。

美術館では八木一夫の作品の他に、彼を中心としたグループ「走泥社」のメンバーの作品や、同時代の陶芸作品も多く所蔵し、公開しているのでそれらの作品とあわせて鑑賞してもよいと思う。

指導要領との関連

[第2学年及び第3学年] 2内容 B鑑賞 ア、エ、オ

目標

- ・ 美術作品に込められた作家の豊かな創造性に気づき、作品の価値を認め、作者の心情に共感を持って鑑賞することができるようにする。

学習展開

学習活動(予想される生徒の反応)	学習内容	指導上の留意点
「陶芸」という言葉で連想することを考え発表する。 ・ 焼きもの ・ 土で作る ・ ろくろ ・ 伝統 ・ 茶碗、湯飲み、花瓶、壺 ・ 使うもの ・ 割れる・茶の湯	思いつくものを自由に挙げさせ板書する。	身の回りにあるものを思い出し「陶芸」と関係あるものを挙げるのができたか。

<p>八木一夫の作品の写真版を鑑賞する。 感想を書いて発表。 一点選んで、何を表しているのか付箋紙に記入。 付箋紙を作品図版の下に貼る。 八木一夫について説明を聞く。 八木一夫の作品のタイトルから発想をして自分も八木一夫になったつもりで立体作品のエスキースを描いてみる。 (事後) 感想文、作品を掲示物として展示する。 美術館で自分が選んだタイトルの作品を見て、スケッチする。</p>	<p>作品図版を掲示。 使うものではなくて、鑑賞する芸術作品としての陶芸というものがあることを理解させる。 八木一夫の作品を素直に鑑賞させて自由な発想で意見を出させる。 八木一夫になったつもりで、または自分なりのオブジェ焼のエスキースを描いてみよう。 選んだタイトルを持つ八木一夫の作品を美術館で見てみよう。</p>	<p>自分なりの感想を持ち、発表することができたか。 言葉から形をイメージし、エスキースに表現することができたか。</p>
--	--	--

準備物

作品写真図版、付箋紙

鑑賞ワークシート

県立美術館所蔵の関連作品		
HA 129	緑釉「塔」	山田光作(1960年)
HA 134	「土の歩み」	宮永理吉作(1957年)
HA 157	「レッドマスク」	佐藤敏作(1983年)
HA 165	「神経質な鳥」	鈴木治作(1975年)
HA 182	「曲線彫文扁壺」	加守田章二(1970年)
HA 214	「笑いの稽古」	熊倉順吉作(1974年)
HA 141	「仮面の談笑」	林秀行(1982年)
HA 145	「背信」	川上力三(1987年)
HA 154	「石の聖書(黒)」	荒木高子(1980年) など

参考文献

没後二十五年 八木一夫展図録 日本経済新聞社 2004年
 オブジェ焼き 八木一夫陶芸随筆 講談社文芸文庫 講談社 1999年
 司馬遼太郎 微光の中の宇宙～私の美術観 中公文庫 1991年
 八木一夫の遺した“言葉” 炎芸術43号 安部出版 1995年
 広島県立美術館コレクション選 広島県立美術館 1996年

鑑賞ワークシート

「陶芸」という言葉でなにをイメージしますか？

焼きもの、土、ろくろ
器、花瓶、使うもの
伝統工芸、高い など

八木一夫の作品を見て感じたことを書いてください。

かわった形をしている、何に使うのか分からない
不思議な形をしている、おもしろい形だ
何か意味ありげだ、きれい、かっこいい、かわいい
陶芸でできているとは思えない など

八木一夫は

(1918 (大正7))年、陶芸家八木一艸の長男として京都で生まれる。

私の小学校時代の成績の中で一番悪いのが、図画・工作、美にかかわる学科でした。

といって私自身、美術に自信がないからやめたいという決心も、別にうかばなかった。なにか、美術をやっておるそのさなかに、心の或る部分がゆすぶられたり、ふるえたりする、そういうふうな状態が、どうも、自分の中に眠っておるといふようなことがあったのではないかと思うのです。

家で(陶芸)を、学校で(彫刻)を学んだ。

昭和23(1948)年(走泥社)を結成、ひとのまねでなく、土を使ってどんな表現ができるか試みた。

はじめは実用的な器にクレーやミロなどに触発された新しい模様を施した作品を発表。

イサム・ノグチやピカソの陶芸作品に触発され、前衛的な陶芸を旨とするようになる。

やきものの一つの美しさを見るということよりも、むしろ、あらわしたいという気持ちが強くありました。

ロマンティックなといいますが、なにか、文学的な世界といったふうなものの、やきものを介しての具現化とでもいうんでしょうか、そういうものをやろうと思っておったわけです。

実用性をとりのぞき、自分自身を表そうとした前衛的な作品は(オブジェ)焼と言われた。

焼成の偶然性を避けた無釉の焼締による力強い作品を制作。

黒陶の手法により、造形的に一層の飛躍を果たした。

黒陶の「本」や「手」など具体的なイメージを表した作品に独自の世界を示す。

八木は有形、無形の古典の中のもっとも良質なものを豊潤に吸いこんだまま、しかも二十代の感受性を千年もちつづける勢いを示しつつけたまま、にわか死んだ。私はこのように世に居て、唯一の経験として天才が死ぬという衝撃を真向からうけさせられた。あとは、作品の中にだけ八木一夫がいると思って生きてゆくしかない。

司馬遼太郎

平成 年 月 日 () 曜日

第2学年 組 番 氏名

選んだタイトル()

八木一夫作品タイトルから想像される作品のエスキースを描く。

自分が選んだタイトルの八木作品を美術館で見てスケッチする。

第2学年 組 番 氏名